バカとFateと召喚獣

ヨッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとＦａｔｅと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ５８６０Ｚ

【作者名】
ヨッキー

【あらすじ】
もし文月学園にＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのキャラがいたらという作品です。
Ｆａｔｅ側のメインキャラは士郎とセイバーと凛、バカテスはメインキャラは原作と変わらない予定です。
若干キャラの性格が変わっているかもしれませんがご了承ください。
※処女作なので文などがおかしかったりするのでそういうところはどうか御指摘ください、またアドバイスなどもお願いします。

プロローグ（前書き）

はじめましてヨッキーです。変なところなどがあると思いますがどうか暖かい目で見守ってください。

プロローグ

雲が少しだけ浮かぶ青空。
満開に咲き誇る桃色一列の桜並木。
道行く人は皆希望に胸を膨らませる。
そんな青空も、そんな桜並木も目の端に追いやり希望に胸を膨らませることもなくただ三人は走っている。

そんなとき突然、黒髪のツインテールを激しく揺らしながら走っている少女――遠坂凛は叫ぶ。
「なんでこうこうなったのよ！」

その叫びに金髪を後ろで結んでいてアホ毛が特徴的な少女――アルトリア・S（セイバー）・ペンドラゴンが答える。
「リンがギリギリまで寝ていたからじゃないっですか！」

「セイバーもギリギリまでご飯食べてたじゃない！」

「いえ、リンが――――」
「いや、セイバーが――――」

二人の口論は次第に激化してゆく。その口論に挟まれている、朱色の髪をした少年――衛宮士郎は耳をふさぎながらも懸命に走っている。
だがその少年もやがて痺れを切らしたのか、
「遠坂もセイバーも喧嘩しながら走しらないでくれ……」と、ため息をつくようにつぶやいた。

この三人が向かっているのは文月学園。文月学園とは、科学とオカルトと偶然によって生まれた『試験召喚システム』により召還者をデフォルメした姿の『召喚獣』を学力低下の対策としているの進学校ことである。

そしてここ――文月学園が今回の物語の舞台である

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします。
また、アドバイスなどをいただけると幸いです。

第一話　クラス発表（前書き）

第一話目です。よろしくお願いします。

第一話　クラス発表

士郎は走りながらも振り分け試験のことを考えていた。――――1年の最後にあった振り分け試験最中、具合が悪くなって途中退場した生徒が無得点扱いになることを抗議していた友人――吉井明久がいた。

その近くには桃色の髪の少女がとても熱っぽい赤みがかった顔をしていたのでそのこのためだと思った。

もともと、困っている人などをどうしても放って置けない士郎だ、そのやり取りをただ見ていることはできなかった。

結局、自分&明久VS試験監督の先生の口論は激しくなっていった、それを見るに見かねた遠坂がその口論の仲裁に入った結果なんとかその口論は終わることができた。

だが、テストの最中に話せば無得点になるのは確実のため自分と明久の無得点は納得がいく。

しかし、止めに入った遠坂までもが無得点扱いなの納得がいかなかった。

これに抗議しにいこうとしたところ遠坂本人が「別にいいわよ」といいながら止めてきたのでしぶしぶ行くのをやめた。

そのあと、テスト中にうるさくしてしまった為、明久と一緒に同じ教室で振り分け試験を受けていたやつらにものすごく文句を言われたのは余談である。

☆

「校門が見えてきたわよ！」その声に物思いにふけていた士郎の意識は戻された。

「お前たち遅刻だぞ！」声だけでもアイテの大きさが想像できてしまう声が三人にふりかかる。

声のするほうに目を向ければ浅黒い肌に黒髪の短髪、鍛え上げられた筋肉を持つ大男――西村　宗一またの名を鉄人がいた。

「おやようございます西村先生」先ほどまでとはまるで違う優等生オーラを身に纏った凛が挨拶をした。

「おはようございます西村先生」凛に続くように士郎も挨拶をする。

「おやようございますテツジン」セイバーも続いて挨拶をするが、『テツジン』という一言により西村先生は眉をひそめる。

「俺を毎回堂々と『鉄人』と呼ぶのはお前だけだぞセイバー……」とつぶやいたが西村先生は一回咳払いをすると、

「それよりお前らこれを受け取れ」といいながら三つの封筒を手渡してきた。

「衛宮、お前は困っているやつとかを放っておけない優しいやつなのはわかってる。だけど自分も大切にしろよ」突然の西村先生の言葉に士郎は弱弱しく返事をした。さらに西村先生は続けて、

「すまん遠坂、お前の無得点を取り消してやれなくて……」とすまなそうに言う。

「いえ、西村先生お気持ちだけでうれしいですよ」と凛は笑顔で返す。それに西村先生も苦笑。

どこか優しい気持ちに包まれている西村先生と士郎と凛に対し、

「テツジン私には何か無いのですか？」と不服そうにたずねると、

「食ってないで少しでも勉強しろ……」と悲しい返答が返ってくる。

士郎と凛の笑い声が聞こえる、

「な！　二人とも笑わないで下さい！」とセイバーが赤顔をしながら叫ぶ。

「まー、お前ら一年間がんばれよ……

Ｆクラスで」

このときから2年Ｆクラスを中心とした、文月学園のバカ騒ぎが始まったのである。

第一話　クラス発表（後書き）

週に1～2回多いときは3回くらいの投稿ペースでいきたいと思います。

第二話　王がいるＡクラス（前書き）

バカテスト
第一問
問　いかの問いに答えなさい
『調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだのだが、調理を始めた際問題が発生した、この問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

衛宮士郎と遠坂凛の答え
『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。　合金の例……ジェラルミン』
教師のコメント
「さすが二人とも勉強をしていますね、大変感心します。振り分け試験は残念でしたがどうかがんばってください」

セイバーの答え
『問題点……おなかが減っていた　合金の例……金粉』
教師のコメント
「すべて食関連なのですが……」

ギルガメッシュの答え
『問題点……この我（　オレ）の許可を得ていなかったから』
教師のコメント
「別にあなたの許可は必要ないと思います」

第二話　王がいるAクラス

士郎たち三人は靴を下駄箱に置き階段を上る。
歩きながら士郎は遠坂の様子を見ていた。
遠坂はFクラスという結果を覚悟はしていたみたいだが、やはり悔しそうにしている。遠坂ほどの実力があれば、よほどのことがないかぎりAクラスは確実だっただろう。それが自分と明久のせいでバカの集団であるFクラスになってしまたのだ、ただ頭を下げることしかできなかった。
「本当にごめんな、遠坂」
「Fクラスはやっぱ悔しいけど、別にいいわよFクラスでがんばればいいじゃない」
「いや、だけど……」
「衛宮君が気にする必要はないのよ？　私が自分の意思で止めに入ったんだから」
「遠坂……」

三階に到着したとき不意をついたようにある方向に指を差しながら「シロウ、リンこの無駄に広い教室はいったい何ですか？」とたずねてくる。
セイバーの一言に俺と遠坂は一斉にセイバーが指を差しているほうを見る。
「何よ、この広い教室……」遠坂は呆気にとられている。
「ここは……Aクラスだな」と俺が答える
三人は大きめの窓から中を覗いてみる。
するとそこにはいかにも知的女性という教師が教壇の前に立っていた。

「皆さん進級おめでとうございます。Aクラスの担任になりました高橋洋子です。1年間よろしくお願いします」その言葉と同時に後ろのディスプレイに名前が映し出される。

「な、な、何よこれ！　個人にノートパソコン！　エアコン！　冷蔵庫！「冷蔵庫ですか！　それは本当なのですか凛！」　そのほかにもいろいろある？　どんだけお金使ってるのよ！」遠坂が怒りの形相で文句を言う。

「た、確かにこれは高級ホテルみたいだな……」俺も遠坂の言ったことにうなずく。

高橋先生はクラスについての説明が終わったらしく次の行動に移った。

「それではクラス代表の生徒を紹介します。前に出てきてください」と高橋先生が言うと、一人の黒髪の長髪の美少女が教壇に向かって歩いていった

「……霧島翔子です。よろしくおね「待て、雑種」……」霧島が挨拶をしていたとき、金髪の少年が挨拶の言葉を遮った。

「この我（オレ）、ギルガメッシュ・ウルクを差し置いてこのクラスの王になるだと？　万死に値する」

「いえ、王ではなく代表なのですが……」と高橋先生の突込みが入る。

「戯け！　このクラスを率いるのやつが必要なのであろう？　すなわち王が必要ということではないか！　ならば王であるこの我（オレ）を差し置いて誰がこのクラスの王になる？」ドヤ顔を決め込むギルガッメッシュ。

「いえ、王は必要ではありません。しかも、あなたがこのクラスの代表になったら学級崩壊する気がします、いえ、絶対します」高橋先生は若干切れ気味である。

「衛宮君、あなたあれは止めないの？」凛があきれ顔でたずねてくる。

「いや、俺もあいつの相手をしたくない……」と苦虫を噛み潰したような顔で答える。

「シロウ、リン早く行きましょう」セイバーがいきなり不機嫌になり出した。

そして最悪の事態は起こった。

高橋先生と言い合いをしていたギルガメッシュがふと横を向くと、ちょうどセイバーが見られてしまった。

「おお、セイバーではないか！　我（オレ）に会いにきたのだな、ういやつよ」と心底うれしそうな顔で近づいてくる。

「よらないで下さいストーカー王」

「照れているセイバーもまたよい」

「く、もう無理です。二人とも私は先に行きます」案外ギブアップの早かったセイバーである。それもそのはず、さすがに会うたんびこの調子でこられたら誰だってひく。

ものすごい勢いでダッシュしていくセイバー。それをニヤニヤしながら見るギルガメッシュ。はっきりいって後者はただの変態にしか見えない、てか変態だ。

「遠坂、教室行こうぜ……」

「そ、そうね……　私Ａクラスじゃなくてよかったかも……」

二人は早足でFクラスに向かっていった。

第二話　王がいるＡクラス（後書き）

感想などよろしくお願いします

第三話　戦争はここから始まる（前書き）

バカテスト
第二問
問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『（1）得意なことでも失敗してしまう』
『（2）悪いことがあた上にさらに悪いことが起きる？.え』

遠坂凛の答え
『（1）猿も木から落ちる』
『（2）泣きっ面にハチ』
先生からのコメント
正解です。両方ともよく聞くことわざですね。サービス問題でしたね。

衛宮士郎の答え
『（1）昨日の夕食』
先生のコメント
なぜでしょうこの文面にものすごい悔しさが込められている気がします

セイバーの答え
『（2）猿の泣き顔に蹴り』
先生のコメント
動物愛護保護団体に訴えられますよ……

第三話　戦争はここから始まる

士郎と凛はＦクラスの教室の前に立っていた。　家から学校まで走ってきた甲斐があり、何とか時間にはまにあった。
ふと視線を上げれば、入り口の上にぶらさっがっている『２－Ｆ』という木製の表札はくもの巣がかかっていて今にも落ちそうになっていた。廊下側の窓はいたるところにひびが入っていてテープで補強した後が見られる。
「すごい設備ね、衛宮君……」凛が顔をひきつらせながらそう言った。

クラスに中に入ると、教壇の上にあぐらをかいて座って瞑想をしている、赤毛で長身の男がいた。
「雄二、おはよう」と士郎は苦笑しながらあいさつをした。
「おはよう、坂本君」凛も士郎に続いてあいさつをする。
彼は士郎たちの友人である坂本雄二。かつては神童と称された『元』天才である。
雄二は片目を見開き、こちらを見ながら、
「士郎と遠坂か、このクラスには貴重な戦力だな」と言い放った。

「それにしても外があれだったから中はどうかと思っていたのだけれど、やっぱりすさまじいわね……」
クラスを見渡せば、床は年期の入った少しかび臭い小汚い畳、机の変わりにほとんど物がどこか欠損しているちゃぶ台、イスの変わりに綿がはみ出ている座布団、外側の窓も廊下側の窓と同じような有様である。

凛はため息をつきながら、先ほど爆走していったセイバーを見つけ、セイバーの方に歩るいていった。

「雄二は何をしてるんだ？」残った士郎は雄二に話しかけた。
「一応俺がクラス代表だし、先生が来るまで教壇に上がってみようと思ってな」
「クラス代表関係なくないか？」
「ん？　そうか？　あまりきにするな」

そのとき、後ろのドアが豪快な音とともに勢いよく開いた。軽い足取りで入ってきた茶髪の少年――吉井明久は
「士郎、雄二おはよー」とテンションの高い声とともにこちらに歩いてくる。
そして明久はシロウの前に来きて何か言おうとしたが士郎がそれを遮り、
「明久、また謝ろうとしてるだろ？」と笑って明久に言った。
「士郎……何で僕の言おうとしたことがわかったの！　まさか超能力に目覚めたの！　そうすると僕も明日あたりには目覚めちゃうんじゃないかな～」
「だまれ、明久バカが移る……」
「雄二は黙っててよ」

今度は明久が入ってきたときとは違いゆっくりとした調子でドアが開いた。
「皆さんＨＲを始めるので席についてください」入ってきたおじさんはＦクラスのみんなに対してそう言った。
全員が席に着く。
「皆さんおはようございます。このたび２年Ｆクラスの担任になりなした福原慎です。よろしくお願いします」
福原先生は、黒板に名前を書こうとしたがチョークが無いことに気づき書くのをやめた。
「それぞれ卓袱台と座布団が支給されていると思います。何か質問や不備がある人は申しえてください」

嵐のごとく不満が先生に降り注ぐが福原先生は見事に流している。
「それでは、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」
「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」
最初に自己紹介したのは肩にかかるぐらいのやわらかい髪、どこか守りたくなる華奢体躯、それと変な言葉遣いが特徴的な美少女――ではなく美少年だった。
これを皮切りに次々と自己紹介をしていく、
「遠坂凛です。一年間よろしくお願いします」
にっこりと笑う遠坂にバカな男子どもが黄色い声援をあげる。
『なんで才色兼備の遠坂さんがFクラスにいるんだ？』
『そんなの、俺に会いに来たからに決まってるだろ』
『いや、俺に会いに来たんだ』
『お前らバカだなー、俺に会いに来たんだよ』
『なにを言ってる俺に決まってるだろ』
だんだん男子の口論が激化していくがそれを福原先生がとめる。
「アルトリア・S《セイバー》・ペンドラゴンです。よろしくおねがいします。
あいさつを終えるとすぐ席に座ってしまうセイバー。
『あれは剣道全国大会覇者にして金髪美少女セイバーさんじゃないか！』
『おい、知ってるかあの伝説、衛宮家の食費の7割がセイバーさんって話』
『知ってるぜ、でも俺セイバーさんためならいくら金を使ってもいいぜ』
『お前わかってるのか？　セイバーさんが本気になったら、俺ら

は多額の借金背負うことになる』
『俺は別にそれでもいい。セイバーさんと結婚できるなら！』
「衛宮士郎だ、なんか悩み事があったら俺に言ってくれいつでも相談に乗るから」
『俺の悩みは彼女ができないことかな』
『ふ、俺もだ』
『ふ、生憎俺もだ』
『ふ、右に同じく』
『てか、俺らにそれ以外の悩みって無くね？』
なんだろうこの悲しい集団はと一瞬思った士郎であった。

その後遅れて入ってきた桃色の髪の少女――姫路瑞希のあいさつも無事に終わり一旦先生が教室を出て行くと明久が雄二をつれて教室を出て行った。気になった士郎は廊下に様子を見に行くと明久と雄二が何か話していた。
「二人ともどうしたんだ？」
「あぁ、明久が姫路の為にAクラスの設備とFクラスの設備を交換したいらしくてな」
「ちょ、雄二バラさないでよ！」
「確かにAクラスの設備はすごかったな……」
明久が士郎を見ながら、
「お願い、士郎も手伝ってくれないかな？」と弱弱しく言ってきた。
「もちろん手伝うよ」士郎は難なく答えた。
「そうと決まれば実行だな」雄二がそう発した。

三人は教室の中に入り士郎と明久はそれぞれ席に着き、雄二は教壇の前に立ちクラスのみんなに質問を投げかけた。
「Aクラス設備は一人一台のノートパソコンから冷暖房器、リク

ライニングシートなどほかにもまだあるらしいんだが――お前ら不満は無いか？」

「「「大ありじゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」」」

「だろう？　俺も代表としてどうにかしたいと思ってる、設備交換したいよな？」不敵な笑みとともに雄二が言葉を言うと、

「やってやる、Ａクラスなんてぶっ潰してやる」

「ぐへ、ぐへ、へへへぇぇぇ」

Ｆクラスのバカどもは狂喜乱舞している。

「ユウジ私は別にこのままでもいいのですが……」セイバーはあまり乗る気ではないらしい。

「Ａクラスお菓子食べ放題らしいぞ」その瞬間セイバーの目が見開き、

「早く奪いにいきましょう、あ、すいません部室から木刀を持ってくるので少し待っててください」

「流血沙汰はやめてくれ」

いまここに『試験召喚戦争』の火蓋は切って落とされた。

第三話　戦争はここから始まる（後書き）

感想があればお願いします

閑話　Aクラスの風景（前書き）

Aクラスの話が書きたかったので閑話として書かせていただきました。

閑話　Aクラスの風景

ギルガメッシュはセイバーの姿が見えなくなるまで廊下に立っていた。

セイバーの姿が見えなくなった後しょうがなく自分の席に戻っていく。

席に着くと、

「で、このクラスの王は我(オレ)に決定したのであろうな？」とギルガメッシュが元の話題に戻る。

高橋先生が何かを言おうとしたとき、ドアが開き、かったるそうな足取りで一人の青髪の男が入ってくる。

「おはようございます、クー・フーリン君」高橋先生が挨拶をすると、クー・フーリンと呼ばれた男は右手を上げ挨拶お返し、そのまま席に着くと机に突っ伏して寝てしまう。

「ランサーよ、主であるこの我(オレ)に挨拶の一つも無いのか？」ギルガメッシュはそう言いながら彼の机に近づいていく。

「誰が俺の主だって？」

「王である、この我(オレ)以外に誰がいる？」

「言てることめちゃくちゃだな、おい」

ランサーがため息をつく、

「てか、お前『王』じゃなくてまだ王位継承権第一位の『王子』だしな……」

ランサーに一言にギルガメッシュが怒りの形相に変わる。

「雑兵の分際で、我を愚弄するだと？」

「俺は事実を言っただけですよーだ、お・う・じ・さ・ま」ランサーが不気味な笑いをギルガメッシュに投げかける。

「貴様とて、ランサーなどと呼ばれているではないか？　頭おか

しいのか？」
「悪りいなぁ、これは俺が国からもらった称号だ。お前の自称王様とは違うんだよ」
「だったら我(オレ)権限でそれを剥奪してやる」
「は、そんなことができると思ってんのかバカ王子」
ギルガメッシュがついにランサーに向かって拳を振るうが難なくそれをランサーは止めてみせる。
「ええい、止めるでないランサー、とっととこの我(オレ)に殴られよ」
「は、無理な相談だ」
幾度かギルガメッシュはランサーを殴るがまったく効果が無いとわかり一旦後方に引く。
「どうするよ自称王様？」
ギルガメッシュは徐にポケットからケータイを取り出す。
「ランサー我(オレ)の権力をなめるなよ？貴様一人ぐらいどうとでもできるは！」
「俺をどうする気だ？」
一呼吸あけてギルガメッシュが答える。
「死刑だ」
「俺何もしてねーじゃねーか！」
「別によいではないか減るものではないし」
「命は一個しか無いわ！」
「貴様は我(オレ)に無礼を働いたのだ死して当然であろう？」
「とんだ暴君じゃねえか」

この二人はとある国の人間である。ギルガメッシュの父はその国の王様で母は世界的大企業にして資産家の娘という正真正銘の王族である。
ランサーは国で主流の武術である槍術を若くして使いこなし幾度と無く退会を制覇している猛者であり国からランサーという名誉あ

る称号を貰っている。
今この二人はとある事情によりわざわざ日本に文月学園に通っている。

喧嘩がヒートアップすると二人は何者かによって頭をたたかれる。
「「誰だ」」二人が一斉にそう叫ぶ。二人の視線の先いたのは、褐色の肌に真っ白な髪、背の高さと鍛え上げられた肉体が印象的な男だった。
「貴様がなぜここにいる？」
「ここの副担任になったからな、一年間よろしくたのむぞランサー、ギルガメッシュ」

ランサーとギルガメッシュはお互い席に着歩いていく、二人が席に着くと。男は教壇の前にたち自己紹介を始めた。
「Aクラスの副担任になった衛宮士剣（しつる）だ、一年間よろしく頼む」

この後クラス代表を決めるのに2時間近くかかったのは余談である。

閑話　Aクラスの風景（後書き）

感想などがありましたらよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5860z/

バカとFateと召喚獣

2011年12月30日03時46分発行